

## 教育実習に関する研究—実習前後の心理的变化について

中野靖彦

(心理学教室)

A Study of the Experience of Teaching Practice- the Psychological Changes pre and after the Experience.

Yasuhiko NAKANO

(Department of Educational Science)

### 問 題

教育実習は、学生が大学で学んだ基礎と教科、教職専門の知識を実践の場において統合し適用しながら、教育活動を計画・遂行するための専門的知識や実践的な能力を身につけ、自己の教職に対する認識を検証する機会でもある。学生は、教育実習生として、教育活動を自らの手で企画・立案し、それを実際に実施・評価する過程を通して、教職に関する専門的能力を育む場として、さらには児童・生徒への理解を深め、教育に対する熱意を高める場として重要な役割をもっている。

しかしながら、学生にとって教育実習はかなり厳しい体験として映る。事実、研究授業の前には、教材の準備などでかなりの時間を費やすし、ストレスも溜まる。しかも、最近の教員採用の状況は厳しく、教員になれるか分からないのに、何週間も朝早くから学校に出向くことになる。

古屋他(1994)らは、「教育実習生のストレスに関する研究」を行なっている。教育実習直後に実施した調査で、書類の作成や授業の準備などで実習がストレスフルなことであることが明らかとなった。実習が期待とともに不安を多く抱えたものである。

本研究は、教育実習が学生にとってどのような意味を持っているのか、実習の前後でどのような変化が生じているか検討したものである。

### 方 法

本研究の調査アンケートは、教育実習(主免)の前・後に実施したものである。

#### (1) 教育実習前

調査対象：教育実習を控えた、愛知教育大学3年生315名である。

調査時期：教育実習の事前指導の場で、質問紙に回答してもらった。

調査内容：①フェースシート；学籍番号、性別、教員免許の種別(学籍番号については、実習の前後で対応させるために記入をお願いした)

②教職に対する志望度、自己適性感についての質問；教職につきたいかどうかについて、「ぜひになりたい」から「全くなりたくない」の4段階で、自己適性感を、「とても向いている」から「全く向いていない」までの4段階で、回答を求めた。

③教育実習についての不安；「研究授業はうまくいくと思いますか」、「健康管理はうまくいくと思いますか」など、授業実施や学校の行事、生活等について36項目を作成した。それぞれの項目について、「思う」から「思わない」までの4段階評定を求めた。

#### (2) 教育実習後

調査対象：実習前に実施したと同じ学生、249名である。(しかし、実際の分析には、回答未記入などがあり少なくなっている。)

調査時期：事後指導の時に実施した。

調査内容：①フェースシートには、実習校名が加わった。

②教職に対する志望度と自己適性感については、事前調査と同じ。

③教育実習についての不安；事前調査と同じ内容について、「研究授業はうまくいきましたか」、「健康管理はきちんとできましたか」と、表現を変えて回答を求めた。

④教育実習で困難を感じたことの内容；③の内容について、「ほとんど困ったり苦勞したことはなかった」から「非常に困ったり苦勞したことがあった」までの4段階で回答を求めた。34項目からなる。

### 結果及び考察

#### 1. 実習前・後での学生の意識の変化

表1には、「あなたは教員になりたいと思っていますか」という質問項目について、「ぜひになりたい」になりたい」と回答した数を、実習前・後と男・女別に表した。

表1 教員希望

実習前				実習後			
	なりたい	なりたくない	計		なりたい	なりたくない	計
男子	91(84.3)	17(15.7)	108	男子	97(88.2)	13(11.8)	110
女子	140(67.6)	67(32.4)	207	女子	119(85.6)	20(14.4)	139
計	231(73.3)	84(26.7)	315	計	216(86.7)	33(13.3)	249

表2 教員適性

実習前				実習後			
	向いている	向いていない	計		向いている	向いていない	計
男子	79(73.1)	29(26.9)	108	男子	81(73.6)	29(26.4)	110
女子	114(55.1)	93(44.9)	207	女子	109(78.4)	30(21.6)	139
計	193(61.3)	122(38.7)	315	計	190(76.3)	59(23.7)	249

この結果をみると、教員になりたいと思っている割合が、実習前では女子学生では70%弱であるのに対して、男子学生は80%を越えているのが分かる。それが実習を終えた後の調査では、85%ほどまでに増加している。

一方、「あなたは、教員に向いていますか」という、教員適性についての結果(表2)をみると、男性の方が割合は高く(70%強)、女性では50%強しかいない。そして、実習後になると、女性の方が男性を上回った。

このような結果をみると、男子学生の方が、教員に向いていると思っているし教員にもなりたい願望が強い。これに対して、女性は、自分が教員に向いていないと思っており、教員志望も低い。しかし、実際に実習に参加してみると、女性の教員志望は増加するし、教員が自分に合った職業であると思うようになる。

## 2. 項目分析

(1)―① まず、実習の事前指導で、実習の参加にあつてどのような点で、学生が不安を抱えているかを調べた。

36項目について、「思う」と「ややそう思う」、「思わない」と「あまり思わない」をそれぞれまとめて、「思う」と「思わない」に2分した。そして、表3には、思わないと回答した者の割合を高い順に示した。その結果、「授業に必要な専門知識は十分だと思いますか」、「適切な発問や指示ができますと思いますか」をはじめとして、教材選びや指導案の書き方、計画性など、実際の授業をすすめるにあつたのことに関する項目で、不安が強いことが明らかとなった。さらに、「子どもたちの集中力を持続させることができますと思いますか」、「子どもの個性を生かした授業ができますと思いますか」など、一人ひとりの子どもとの対応などに自信のないことが伺え

る。

この中で、「睡眠時間は十分に取れると思いますか」の項目で、75%近くの者が「思わない」と応えている。学生は、実習に行く前には、実習中は忙しくて、寝る暇もないということ先輩から聞くことも多い。実習は忙しいものと思込んでいる面はある。

また、「思わない」の割合が低い項目には、身だしなみや時間の厳守のこと、書類提出のこと、健康管理などであった。これらは、実習前から厳しく指導されているし、先輩からも十分の注意を受けていることであり、心得ていることでもある。

実習校の指導教官やほかの先生方との人間関係や学校の方針に合わせていけるかといった内容についての不安は少ないようだ。

(1)―② 同じ表3には、実習を終えたあとで、事前実施したと同じ項目で回答を求めた結果を載せた。

実習前に自分ではできないと思っていたことが、実習を経験してどう変化したかをみると、全体としては、「思わない」は減少する。それでも、「適切な発問や指示ができましたか」、「授業に必要な専門知識は十分であったと思いますか」、「子どもの個性を生かした授業ができましたか」、「子どもの予期せぬ反応に対応できましたか」、「板書はわかりやすく書けましたか」などは、実習後も半数以上の者ができないと思っていた。これらは、実習校から事前の指導が必要であると指摘される内容でもある。

そして、睡眠時間は十分に取れなかったようだ。最近では、実習校に夜遅くまで残ることは少なくなったが、それでも研究授業の前になると、どうしても時間が足りなくなり、徹夜をして研究授業を済ませたという話も聞く。

しかし、全体として、実際に実習を経験することに

表3 ‘思わない(不安)’%の男女, 実習校別, 全体

項 目	全 体		男 子		女 子		附 属 校		一 般 校	
	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
6. 授業に必要な専門知識は十分	83.5	58.2	76.9	53.6	<u>87.0</u>	<u>61.9</u>	76.5	61.8	82.6	56.6
13. 子どもたちの集中力を持続させる	77.8	50.2	<u>71.3</u>	51.8	<u>81.2</u>	48.9	74.5	56.6	<u>75.2</u>	47.4
14. 適切な発問や指示ができる	<u>75.6</u>	<u>68.3</u>	<u>65.7</u>	<u>68.2</u>	<u>80.7</u>	<u>68.3</u>	<u>72.5</u>	<u>75.0</u>	<u>73.2</u>	<u>65.3</u>
19. 睡眠時間は十分に取れる	<u>74.3</u>	54.2	<u>68.5</u>	<u>60.0</u>	<u>77.3</u>	49.6	<u>86.3</u>	<u>78.9</u>	<u>69.1</u>	43.4
3. 子どもの実態に即した教材選びができる	<u>70.5</u>	34.5	<u>73.1</u>	33.6	<u>69.1</u>	35.3	<u>80.4</u>	44.7	<u>68.5</u>	30.1
2. 子どもの個性を生かす授業ができる	<u>69.8</u>	53.0	<u>63.0</u>	56.4	<u>73.4</u>	50.4	<u>62.7</u>	51.3	<u>72.5</u>	53.8
32. 指導案はきちんと書ける	<u>69.1</u>	20.5	<u>71.0</u>	23.6	<u>68.1</u>	18.2	<u>68.6</u>	27.6	<u>73.8</u>	17.3
33. 計画的に実習を進めることができる	<u>66.2</u>	30.5	<u>63.6</u>	32.7	<u>67.6</u>	28.8	<u>70.6</u>	40.8	<u>66.4</u>	26.0
11. わかりやすい授業ができる	<u>65.7</u>	44.2	57.4	45.5	<u>70.0</u>	43.2	58.8	55.3	<u>63.1</u>	39.3
8. 教材研究はきちんとできる	<u>65.4</u>	39.4	<u>65.9</u>	42.7	<u>65.2</u>	36.7	<u>70.6</u>	47.4	<u>65.1</u>	35.8
15. 特別活動や道徳の授業はきちんとできる	<u>65.3</u>	40.2	54.6	30.9	<u>68.1</u>	47.5	<u>62.7</u>	40.8	<u>68.3</u>	39.9
5. 子どもの予期せぬ反応に対応できる	<u>63.2</u>	51.8	52.8	51.8	<u>68.6</u>	51.8	<u>64.7</u>	<u>60.5</u>	<u>63.1</u>	48.0
7. 専門外の授業もこなすことができる	<u>62.2</u>	34.9	<u>60.2</u>	39.1	<u>63.3</u>	31.7	<u>66.7</u>	59.2	57.5	24.3
1. 研究授業はうまくいく	<u>60.6</u>	39.8	<u>60.2</u>	45.5	<u>60.9</u>	35.3	<u>60.8</u>	51.3	<u>60.4</u>	34.7
9. 板書はわかりやすく書ける	59.7	51.0	<u>67.6</u>	59.1	55.6	44.6	<u>64.7</u>	50.0	59.7	51.4
28. 子どもへの生活指導はきちんとできる	51.4	41.0	43.5	37.3	55.6	43.9	51.0	38.2	48.3	42.5
4. 子どもは授業を理解してくれる	49.5	20.7	50.0	21.8	49.3	18.7	49.0	27.6	52.3	16.8
35. 参加・観察記録はきちんと取れる	43.3	11.6	42.5	11.8	38.6	11.5	35.3	17.1	49.7	9.2
26. 子どもと接する時間は十分に取れる	43.2	24.1	41.7	17.3	44.0	29.5	43.1	26.3	44.3	23.1
12. 楽しく学べるように工夫できる	41.9	20.5	41.7	24.5	42.0	17.3	37.3	22.4	41.6	19.7
16. 場面の応じて適切なことは遣いができる	40.0	37.8	41.7	35.5	39.1	39.6	39.2	39.5	43.0	37.0
21. 無理のない勤務時間・通勤方法	40.0	19.3	39.8	22.7	40.1	16.5	<u>66.7</u>	34.2	24.8	12.7
24. 子どもたちの話題についていける	40.0	14.9	38.0	12.7	41.1	16.5	33.3	13.2	45.0	15.6
22. 挨拶状・礼状はきちんと書ける	38.4	<u>61.8</u>	40.7	<u>67.3</u>	37.2	57.6	37.3	56.6	39.6	64.2
27. 教師としてけじめのある態度が取れる	38.1	29.3	35.2	31.8	39.6	27.3	37.3	32.9	36.2	27.7
29. 指導教官との人間関係はうまくいく	33.0	7.2	38.0	6.4	30.4	7.9	35.3	10.5	30.9	5.8
30. 実習校の先生方との人間関係はうまくいく	33.0	6.0	35.2	6.4	31.9	5.8	33.3	14.5	30.9	2.3
25. 全ての子どもに平等に接することができる	31.1	18.5	32.2	23.6	30.4	14.4	35.3	23.7	31.5	16.2
31. 学校の方針にうまく合わせていく	30.9	10.4	41.1	12.7	25.6	8.6	37.3	21.1	28.9	5.8
36. クラブ活動・部活動に積極的に参加でき	29.0	30.1	23.4	23.6	32.9	35.3	39.2	48.7	27.5	22.0
10. 大きな声ではきはきと話すことができる	24.4	16.1	16.7	15.5	28.5	16.5	19.6	13.2	28.9	17.3
18. 健康管理はきちんとできる	23.8	22.1	21.3	22.7	25.1	21.6	25.5	30.3	22.1	18.5
34. 期限通りに書類を提出できる	19.1	17.3	23.4	18.2	16.9	16.5	15.7	27.6	20.8	12.7
23. 子どもたちとうまく話ができる	15.9	5.6	12.0	5.5	17.9	5.8	19.6	6.6	16.1	5.2
20. 時間はきちんと守れる	14.6	13.7	16.7	18.2	13.5	10.1	21.6	22.4	18.1	9.8
17. 服装や身だしなみはきちんと整えられる	11.1	9.2	11.1	10.9	11.1	7.9	11.8	10.5	12.8	8.7

よって不安もかなり減少することがわかった。

また、「挨拶状・礼状はきちんと書きましたか」という項目は、事後では60%強になった。実習を終えた後、指導教官や学校にお礼はしっかりすることは当たり前であり、学生もそう思っていたが、実際にはできていない。

(2)① 男女差について

また、表3には、実習前と後での回答について、男

女別に載せた。‘思わない’が60%越えた項目に下線をつけた。これをみると、実習前には、全体として、女性の方が高い数値を示している。「分かりやすい授業ができるか」「特別活動や道徳の授業がうまくできるか」「子どもの予期せぬ反応に対応できるか」、さらには専門知識、発問などの項目で男子より高い傾向にある。自分が教員に向いていないと思っている女性が多いこととも関連しているのかも知れない。

ところが、実際に実習を終えると、男女ともほとん

表4 ‘苦勞した’%の高い項目

項目	全体	男子	女子	附属校	一般校
14. 適切な発問や指示をする	65.1	69.1	61.9	65.8	64.7
1. 研究授業をうまく行なう	61.4	58.2	64.0	64.5	60.1
4. 授業をきちんと理解させる	59.8	66.4	54.7	64.5	57.8
13. 集中力を持続させること	59.4	64.5	55.4	55.3	61.3
2. 子どもの個性を生かす授業	58.6	63.6	54.7	64.5	56.1
5. 子どもの予期せぬ反応への対応	55.4	59.1	52.5	64.5	51.4
32. 指導案の書き方	51.4	57.3	46.8	59.2	48.0
9. 板書はわかりやすく書く	47.4	59.1	38.1	51.3	45.7
19. 睡眠時間の確保	42.6	48.2	38.1	75.0	28.3
11. わかりやすい授業	49.8	52.7	47.5	57.9	46.2
7. 専門外の授業	39.0	38.2	39.6	52.6	32.9

‘苦勞した’%の低い項目

項目	全体
17. 服装や身だしなみ	5.6
20. 時間をきちんと守る	7.6
30. 実習校の先生方との人間関係	8.4
23. 子どもたちとうまく話す	8.8
29. 指導教官との人間関係	9.6
31. 学校の方針に合わせる	10.0
10. 大きな声ではきはきと話す	10.8
24. 子どもたちとの話題	10.8

どの項目で数値が下がっている。

(2)② 実習校の差について

ここでは、実習した学校によってどのような差があるかを、一般校(173人)、附属校(76人)別にまとめたのを表3に加えた。

附属校で実習をする学生の実習前では、「睡眠時間がとれるか」「実態に即した教材選びができるか」「勤務時間・通勤方法」についての不安が強い。実際に、遠距離から通う学生もいて、このような不安はよく聞く。しかも、実際に睡眠時間を確保するのも苦勞したようだ。一般校での実習した学生の方はそのようなことは少なく、実習後では多くの項目で、思わないの%が減少している。

(3) 実習で困難に感じたこと

学生の半数以上が困難を感じた内容(表4)としては、「適切な発問や指示をすること」、「研究授業のこと」など、授業のすすめ方に関すること、さらに「子どもの個性を生かす授業をすること」、「子どもたちの集中力を持続させること」、「子どもの予期せぬ反応に対応する」など、子どもとの関わり方についてである。

男女を比較してみると男子学生の方が、また附属校での実習の方が苦勞したと回答している。

(1)や(2)の分析もわかるように、身だしなみや提出書類や実習校でのすべきことなどは、事前指導などでマニュアル通りに行なえば、大きな失敗はないし学生も心得たものである。しかし、子どもとの触れ合いは、ある意味では初めての体験である。しかも、クラスの子どもはみな同じ年令であるし、大きな差はないとも思えるが、実際は、個人差が激しく、自分の思い通りにいかないことを痛感させられる。このことは、事前指導でいくら説明しても、実際に体験しないとわからないことでもある。

教師というのは、毎日が新たな出会いである。その時、その場の状況に応じて柔軟に対応できなければ動まらないが、長い経験がものをいう。それを実習生に期待するのは無理であるが、大学時代に子ども関係のサークルに入っていた学生が、実習校でも楽しいんでいた話を聞くと、実習の時期やあり方についても今後の検討が必要かも知れない。

ま と め

① 全体をまとめれば、教育実習を経験することによって教員志望が増えることは確かである。とくに、女子学生にとってその傾向が顕著であった。とにかく、学生にとって、実習の体験が将来の教職志向にプラスになることは意味のあることである。

これまで、多くの学生は3年生で4週間の実習を経験する。まさに、大学で学んだ基礎的知識を生かしながら、新たな経験をするわけであるが、不安は計りしれない。しかし、たとえ数週間でも、毎日学校に通っているうちに、不安も減り、実習を終えると教員志望支者が増える。ただし、授業の細かいテクニックや子ども一人一人に配慮しながらの教育はこのような短い体験では不可能であるが、実際に学校で行事に参加したり研究授業で苦勞する中で、また子どもや教員と触れ合う中で多くを学ぶのである。具体的に何何を学んだとは言えないが、教職というものを感覚的に会得して

いる。これは大学では教えられないものである。

②今後は、大学1年生から教育実習が導入される。基礎実習といわれるものである。これは、もっと早い段階で、学校の現場を知ることによって、大学での勉強の身の入れ方が異なってくることで、早くから教員志望をもって勉強させようとの狙いがある。

たしかに、本研究でも明らかにされたように、実習を経験すると教員志望が増える。その意味でも、早くから実習を入れることは大変に重要であるが、実習のあり方が問題である。1年生の基礎実習は、教員への導入である。入り口での教育を間違えると、後への影響が強すぎる。そこで、あまりにも苦い体験をすると教員を諦めてしまうこともあるし、もし良い体験をすれば、大学での授業に対する取り組みは違ってくるし、積極的にもなっていく。

阿形(1997)は、教育実習後の教職志向について検討していて、もともと教職志向の強くない者が実習を経験してもそれほど変化はないという結果を示している。早い段階での実習は、教職への志向を早くから明確にすることになる。一方で、教員を嫌がる学生も出る。そのような、学生のその後の指導をどうするかは大きな問題である。

4年間で積み上げて、教員養成を行なうことは大切であるが、今、全ての学生が教員になれる時代ではない。教育に関係しながらも教員以外の道、さらには教

育と関係しない職業につくこともありうる。

③また、学校だけの教育実習だけで教員が育つ時でもない。教員になるためには、2年生で介護体験を経験することになるが、本当は、民間会社あるいは施設などでの社会体験、地域での活動などの参加といった体験活動ももっと必要である。むしろ、教員というのは社会の流れも熟知していなければならないと思うし、もっとも豊かな体験者でなければならないと思う。そうしないと、総合的な学習をはじめ、体験学習が重視されるこれからの学校で、教員だけがとり残されることにもなりかねない。

## 文 献

- 阿形健司 1997 「教育実習後の教職志向に関する一考察」愛知教育大学教科教育センター研究報告 21号, 109-114.  
古屋健・坂田成輝・音山若穂 1997 「教育実習生のストレスに関する研究」日本教育心理学会第39回総会発表論文集 552-553.  
山下松蔵・白井博 1995 「教育実習経験の影響：実習の前後の心理的な経験」日本教育心理学会第37回総会発表論文集 320-321.

## 注

本報告は、平成10年度 大元亜矢子の卒業論文「教育実習に関する研究」を筆者がまとめ直したものである。

(平成11年9月9日受理)